

和歌山県有田郡吉備町

野田・藤並地区遺跡第2次整理概報

—— 弥生時代後期末～室町時代出土遺物の概要 ——

1984. 3

和歌山県教育委員会

序

和歌山県教育委員会では、昭和56・57年度の二ケ年にわたり、日本道路公団による海南湯浅道路の建設に伴い、有田郡吉備町に所在する野田・藤並地区遺跡の発掘調査を実施してまいりました。同地域は弥生時代の環濠集落として著名な田殿・尾中遺跡をはじめ多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、有田郡のみならず和歌山県下にあっても重要な遺跡の集中する地域として知られており、今次の発掘調査でも貴重な遺構・遺物が数多く検出され多大な成果を収めました。

発掘調査によって蒐集した遺物は、各時代における私達の祖先の息吹きと、その時代の歴史的背景を反映する貴重な資料であります。野田・藤並地区遺跡の資料整理は三ケ年計画で昨年度から着手し、本年度は旧石器ならびに弥生時代から室町時代にかけての土器類を中心に整理作業を実施しました。膨大な資料の中には、近畿地方ほかの各地域との文化交流を示すものが含まれており、和歌山県の歴史、就中、有田地方の歴史を考えるうえで不可欠の資料としてその公表が望まれています。そこで、昭和58年度整理調査の概要を御報告する次第です。皆様方の調査・研究資料の一端ともなれば幸いに存じます。

最後に本書の作成に当たり、種々御指導、御協力をいただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

昭和59年 3 月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高橋 正 司

例 言

1. 本書は、和歌山県教育委員会が日本道路公団より委託を受けて実施した昭和58年度野田・藤並地区遺跡出土遺物整理事業の概要報告である。
2. 整理事業の組織は、下記のとおりで、和歌山県教育委員会の指導のもと社団法人和歌山県文化財研究会が実施した。
3. 整理事業は、和歌山県文化財保護審議会委員の指導を受け、文化財課主査 藤井保夫、社団法人和歌山県文化財研究会技術員 渋谷高秀が担当した。
4. 本概報の作成は、渋谷が担当した。
5. 本概報の図版三～六の土器実測図中、左下の番号は容量を示す。
6. 本概報の作成にあたっては、県文化財課、社団法人和歌山県文化財研究会技術員、紀伊風土記の丘管理事務所諸氏の助言・協力があった。また、尾上 実、宇治田和生、川越俊一、鈴木秀典、長門満男、萩本 勝、橋本久和、平尾政幸、堀内明博、百瀬正恒の各氏からは、諸々御教示を受けた。記して感謝する。

調査の組織

調査委員	羯 磨 正 信	(和歌山県文化財保護審議会委員)
〃	巽 三 郎	(〃)
〃	都 出 比 呂 志	(〃)
〃	藤 沢 一 夫	(〃)
調査員	藤 井 保 夫	(和歌山県教育庁文化財課主査)
〃	渋 谷 高 秀	((社)和歌山県文化財研究会技術員)
事務局	鍋 島 伊 津 夫	(和歌山県教育庁文化財課課長)
	伊 藤 正 也	((社)和歌山県文化財研究会事務局長)
	北 野 全 美	(和歌山県教育庁文化財課主幹)
	梅 村 善 行	(〃 課長補佐)
	桃 野 真 晃	(〃 第二係長)

I 調査概要

I 調査経過

野田・藤並地区遺跡は、和歌山県教育委員会が昭和55・56年度に日本道路公団より委託を受け、海南湯浅道路建設工事に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施した遺跡である。両遺跡の整理事業は^{註1}昭和57年度より3ヶ年間の予定で日本道路公団より委託を受けて実施し、昭和57年度は主として野田地区遺跡より出土した木器類を、本年度は、藤並地区遺跡出土の旧石器と野田地区遺跡出土の弥生末～鎌倉時代にかけての土器類の整理を実施した。^{註2}

註1 和歌山県教育委員会「野田・藤並地区遺跡発掘調査概報」昭和56年3月

〃 「野田・藤並地区遺跡発掘調査概報Ⅱ」昭和57年3月

註2 〃 「野田・藤並地区遺跡第1次整理概報」昭和58年3月

II 紀伊における有田川水系の占める位置

近時、有田川水系の発掘調査資料は増加しつつある。有田川水系が、紀伊全体の中でいかなる位置を占めるのか、本水系が蓄積する3～4世紀の地域性の問題を考える。

1. 紀北・紀中・紀南地帯とその考古学資料

紀伊は、紀の川・有田川流域を中心とする紀北地帯、日高川を中心とする紀中地帯、南部川・会津川を中心とする紀南地帯の三地域に、河川流域を単位とした地域的政治集団の成立が弥生～古墳時代前期にかけて認められる。(fig 1) これら三地域の遺跡群の動態を把握する作業は、地域に成立した政治集団の内容やその実態を解明する上でも、また地域に即した歴史の展開をみる上でも、

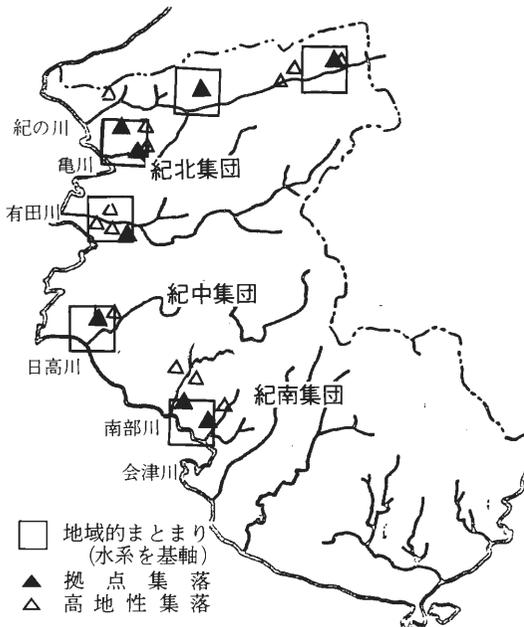


fig 1 紀伊弥生遺跡群

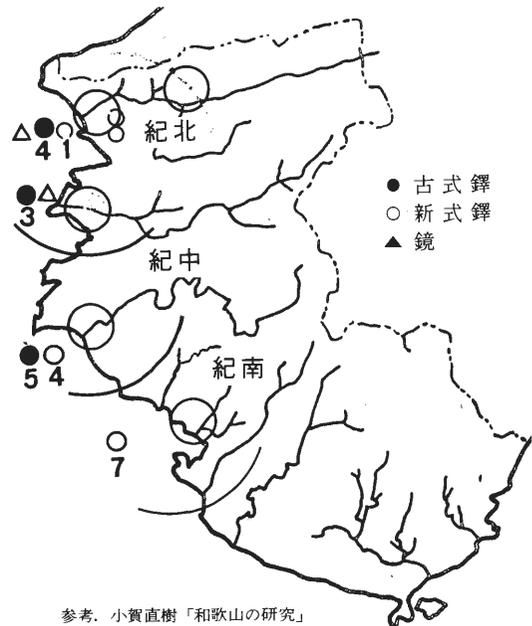


fig 2 紀伊銅鐸分布図

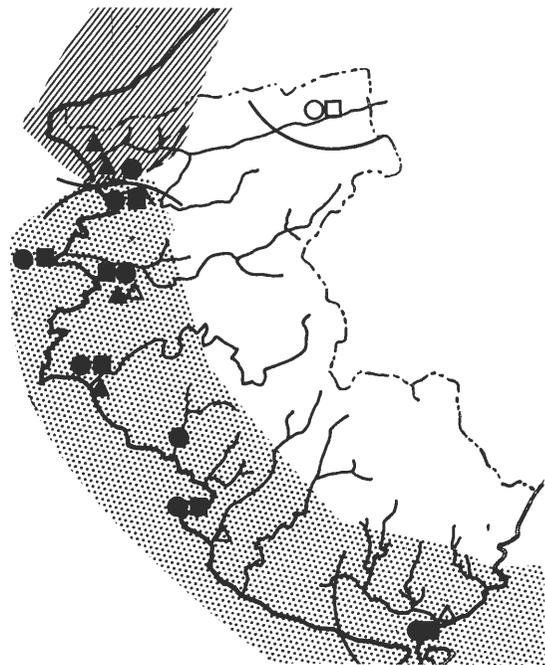
必要不可欠である。地域性を鮮明にする作業には、生活に密着し、地域色を最も顕著に投影させる遺物群—土器類—と銅鐸や鏡など政治性を帯びる遺物群の二側面からの視点が必要である。両者の分布は、必ずしも一致しない。これは、日常に即した遺物である土器とそうでない銅鐸や鏡という遺物の相違によっている。有田川水系は、その相違が明瞭に出る地域である。

銅鐸と鏡の分布 ——三地带間の相異—— 紀伊において、三地带の区分を設定して銅鐸の分布をみると、紀北地帯は、古式鐸の比率が高く、新式鐸は1鐸にすぎない。紀南地帯は逆に、新式鐸のみである。^{註1} 両者の中間に位置する紀中地帯は、古式・新式両鐸が拮抗する地域である。銅鐸分布には、鮮明に三地带間に古式・新式各鐸の分布の相異がみられる。有田川水系は、古式鐸が集中しており、紀ノ川水系を中心とする紀北地帯に含まれる。一方、鏡の分布についてみると、より鮮明に三地带間の相異が判明する。古式鐸が集中して分布する紀北地帯には、紀の川水系に伝岩橋で三角縁神獸鏡が二面、有田川水系には円満寺出土といわれる内行花文鏡二面が存在する。古式・新式各鐸が拮抗する紀中や新式鐸のみで構成される紀南地帯には、仿製鏡のみが出土する。銅鐸・鏡の分布においては、紀ノ川水系に近接する有田川水系は、紀北地帯に含まれる。

土器の地域色 弥生～古墳時代前期にかけて、三地带間における土器の地域色の問題はどうか。各器種には、それぞれ地域色が看取されるが、弥生後期～古墳時代前期にかけて最も視覚的に変化の激しい——とりわけ弥生後期～古墳時代初頭——「高杯」を考える。

弥生後期後半～末段階にかけて高杯の裾部に穿たれた孔の大きさは、紀の川水系を除く他水系全て大きく、畿内地方とは明瞭に相異する。また古墳時代前期の「粘土紐巻き上げ」技法によって成形される独得の高杯は、紀の川や亀の川水系にはみられず、有田川を最北限とした紀中～紀南地方の地域色である。土器にみる限りでは、有田川水系は、紀南と共通性が強く、紀の川水系とは様相を異にする。逆に言えば、日常に密着した土器を紀伊全体からみれば、紀の川水系のみが他水系と相異する。以上、2つの側面から有田川水系をみれば、土器は紀南地方と共通し、青銅器類は、紀の川水系を中心とする紀北地帯に属することになる。

註1 小賀直樹「和歌山の研究 考古編」等で、既に銅鐸分布に関してのべられている。



- 高杯、裾部孔の大きい地域
- 〃 〃 小さい 〃
- 甕口縁部刻み目あり
- 〃 なし
- ⋯ 紀伊色の強い土器をもつ地域
- //// 畿内色の 〃
- ▲ 庄内甕出土地点
- △ 粘土ひもまき上げ高杯出土地点

fig 3 紀伊弥生末～古墳前期 土器地域色

Ⅱ 出土遺物の概要

野田・藤並地区遺跡からは、旧石器、弥生末～鎌倉・室町時代にかけての遺物が出土した。量的にも多く、時期も各時代にわたっている。有田川水系における編年や地域色の設定など、多岐にわたる問題点の基礎資料として、野田・藤並地区遺跡出土資料の占める位置は大きい。

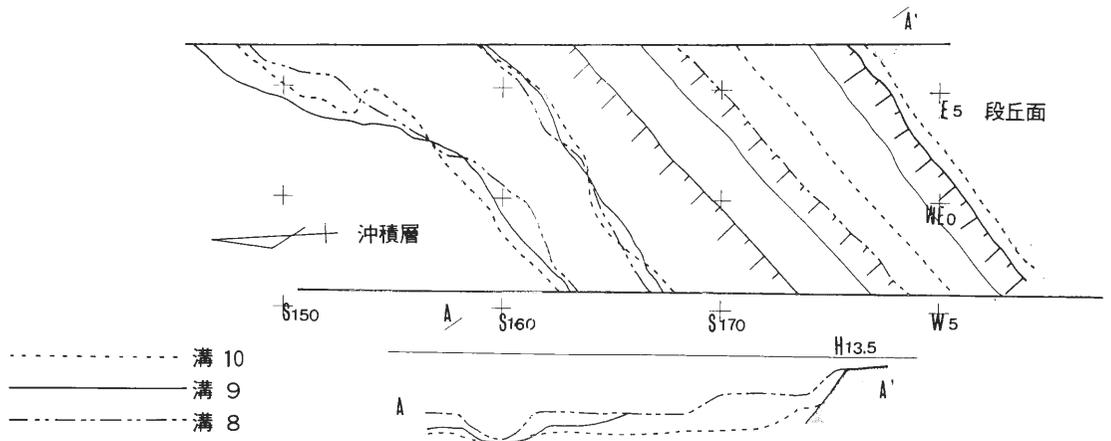
1. 野田・藤並地区遺跡出土遺物とその整理方法

野田地区遺跡検出遺構は、段丘上（5～7区）と沖積層上（4区）に2区分される。段丘上から検出された遺構は主に中世のもので、段丘上面に掘削された溝・ピットなどである。4区検出遺構は、段丘と沖積層の境界部に弥生末～室町時代まで層位を異にして掘削されつづけた十条の溝群がある。出土遺物は、弥生末～古墳時代前期にかけては、4区の段丘上から沖積層へ流れ込んだと考えられる斜面に堆積した包含層と三条の溝群から、平安時代前～中期の遺物は、切り合いをもつ3条の溝群から、平安後期～鎌倉・室町時代にかけては、4区の4条の溝群と5～7区検出遺構より各自出土する。出土遺物の大半は、4区からのものである。弥生末～中世の主要な遺物を出土した4区は、斜面に流れ込んで堆積した包含層や層位を異にしつつ複雑に切り合った溝状遺構など、段丘上面で検出された単純な遺構に比べて、遺構や包含層の性格上、資料のもつ編年の価値は低い。4区出土資料を対象とした整理は、切り合いをもつ十条の溝群に対しては、溝10～8、溝7～5、溝4～1の各時代別に徹底した接合作業を実施し、各溝群の掘削・使用・廃絶時期を把握できる様にした。溝群は、その掘削された位置や流れをもつことなどから灌漑用の溝であり、層位や切り合いから二条の溝が並列して流れることはない。溝が廃絶され、新たに新掘削する際、廃絶された溝内に堆積した遺物群が混入し、原位置を喪失したと考えられるため、接合作業を徹底し、溝内に堆積した遺物の原位置への復元に努めた。斜面に堆積した包含層は、堆積状況からは、斜面への堆積の原因は人為的か自然のものか確証は欠くが、斜面へ何層にもわたって堆積しているため、上層との混入があるとみなし、接合を器種別に徹底し実施した。以上の4区の出土遺物の整理とともに、5～7区出土遺物に関しては、量的にまとまりがあり、投棄された遺物に一括性が認められる遺構については、器種構成などの作業も実施した。

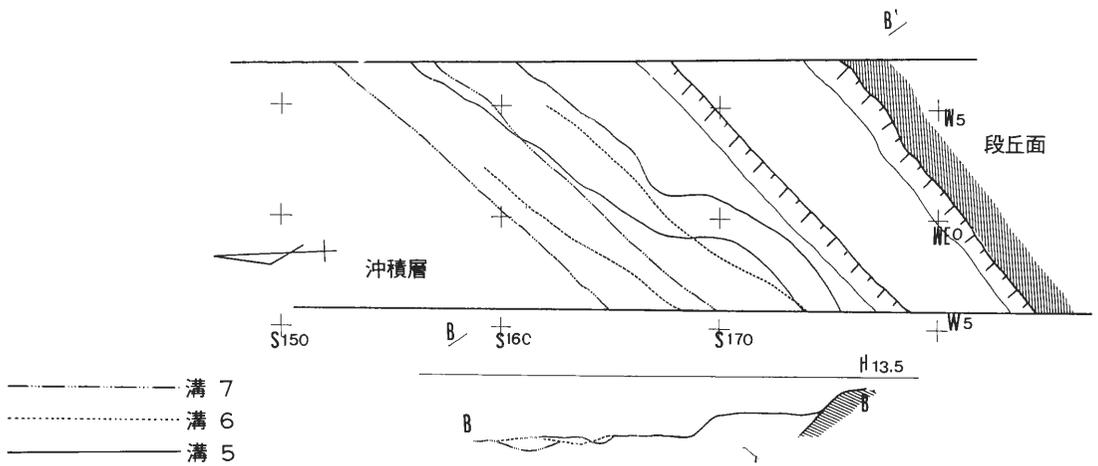
2. 弥生時代後期末～古墳時代前期

野田地区遺跡4区・溝10～8、段丘斜面に堆積した包含層から、後期末～古墳時代前期（須恵器出現期）にかけての遺物の出土があった。包含層は比高差4m程度の急斜面中に段丘より流れ込んで堆積した状態で検出され、また溝群三条も層位を異にしながらかつ互に切り合いをもって検出された。包含層と溝群の層序関係は、灰色粘性土→溝10→黒褐色粘土→溝9・8である。

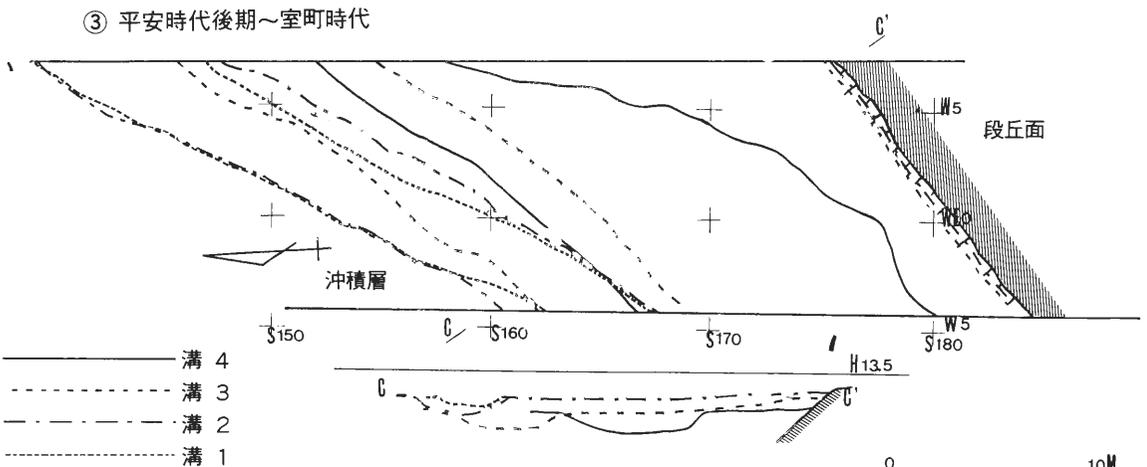
溝10 壺（16・17）、甕（5～11）、高杯（12～15）、鉢（1～4）などある。甕は内面ハケ（6）やケズリ（7～9）がある。高杯は、粘土紐を巻き上げ成形し、脚部中央がややふくらみをもつタイプで紀南～紀中の布留期に盛行するものである。脚部内面はケズリをもたない。庄内～布



① 弥生時代後期末～古墳時代前期



② 平安時代前～中期



③ 平安時代後期～室町時代

fig 4 4区 溝群流路変遷模式図

0 10M

留期にかけての2群の遺物を含む。

溝9 壺(25~27)、甕、高杯(18~24)、鉢(28)、陶質土器の甕(29)などがある。

溝8 壺(30)、甕(35)、高杯(31~34)、初期須恵器(36)などがある。

灰色粘性土 段丘斜面の最下位に堆積した包含層で弥生後期末~庄内期にかけての遺物を含む。壺(39~43)、甕(48~54)、高杯(44~46)、鉢(35~38)などある。甕は、2~3分割で成形する。成形第1段階の逆円錐台部分が体部中位に近くあるもの(52)や下位にくるもの(53)、平底からドーナツ底或いは、底部が平坦なもの(53)などある。タタキは、2~4条/cmまであり、タタキ主軸方向は右上りである。口縁部叩き出し技法でつくり、のち口縁端部を接合するが例外的に口縁と体部を別々に成形し、のちに接合するタイプ(54)もある。壺は広口壺、二重口縁壺などあり広口壺も、口縁端部を下方に拡張するもの(42)から、しないもの(40)まである。41は紀伊においては類例がなく、搬入品である。高杯は、屈曲する杯部(45・46)や椀形の杯部(47)をもつものがあり、裾部の発達著しい(47)。鉢は、直口した口縁をもつ(38、35)ものや屈曲して立ち上がる口縁部をもつ(37、36)ものがあるが、後期末にみる明瞭な屈曲ではなく、稜線状に残存するのみである。

黒褐色粘土 斜丘斜面に堆積した包含層で、灰色粘性土より層位的に上位に位置し、庄内~布留期古相にかけての遺物を含む。壺(59.60.64.65)、甕(62.63.66~70)、高杯(55~58)、鉢(71)、小型丸底壺、ふいごの羽口などある。甕は、既に丸底化しており、成形第1段階の逆円錐台部が下位になっている。接合部は、明瞭な稜線をもつもの(67、70)がある。内面調整は、灰色粘性土出土遺物には1点も存在しなかったヘラ削りをもつ甕(68、69)やナデ調整(67、70)のものなどある。外面は、タタキ技法(右上り68・69、左上り67・70)をおこなうタイプやハケによるもの(61)などある。高杯は、屈曲して立ち上がる杯部をもつもので、椀形の杯部をもつものはない。脚部の成形技法が明瞭に判明する資料が大半をしめる。脚部は粘土紐巻き上げ成形でつくられており、脚部中位がふくらむタイプもある。脚部内面へのヘラ削りはおこなわない。外面は、横方向に細かく、間隔の荒いヘラ磨き調整をおこなうものがある。粘土紐巻き上げによる高杯は、紀南地方にその類例をみる。壺は、外反する口縁部をもつ(64・65)ものや、小型で外面にヘラ磨き調整をおこなわないタイプ(59・60)などある。

他に野田地区遺跡4区の段丘斜面に堆積した包含層には、須恵器出現期前後の時期までの遺物の出土がある。

3. 平安時代前~中期(図版1、2、11)

藤並地区遺跡・溝1や、層位、流路を変え、重複関係をもつ野田地区遺跡4区・溝7~5の三条の溝群からは、平安時代前~中期、9~10世紀代の遺物の出土があった。

野田地区遺跡4区・溝7(図2、図版)

溝7の遺物は、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器などがある。

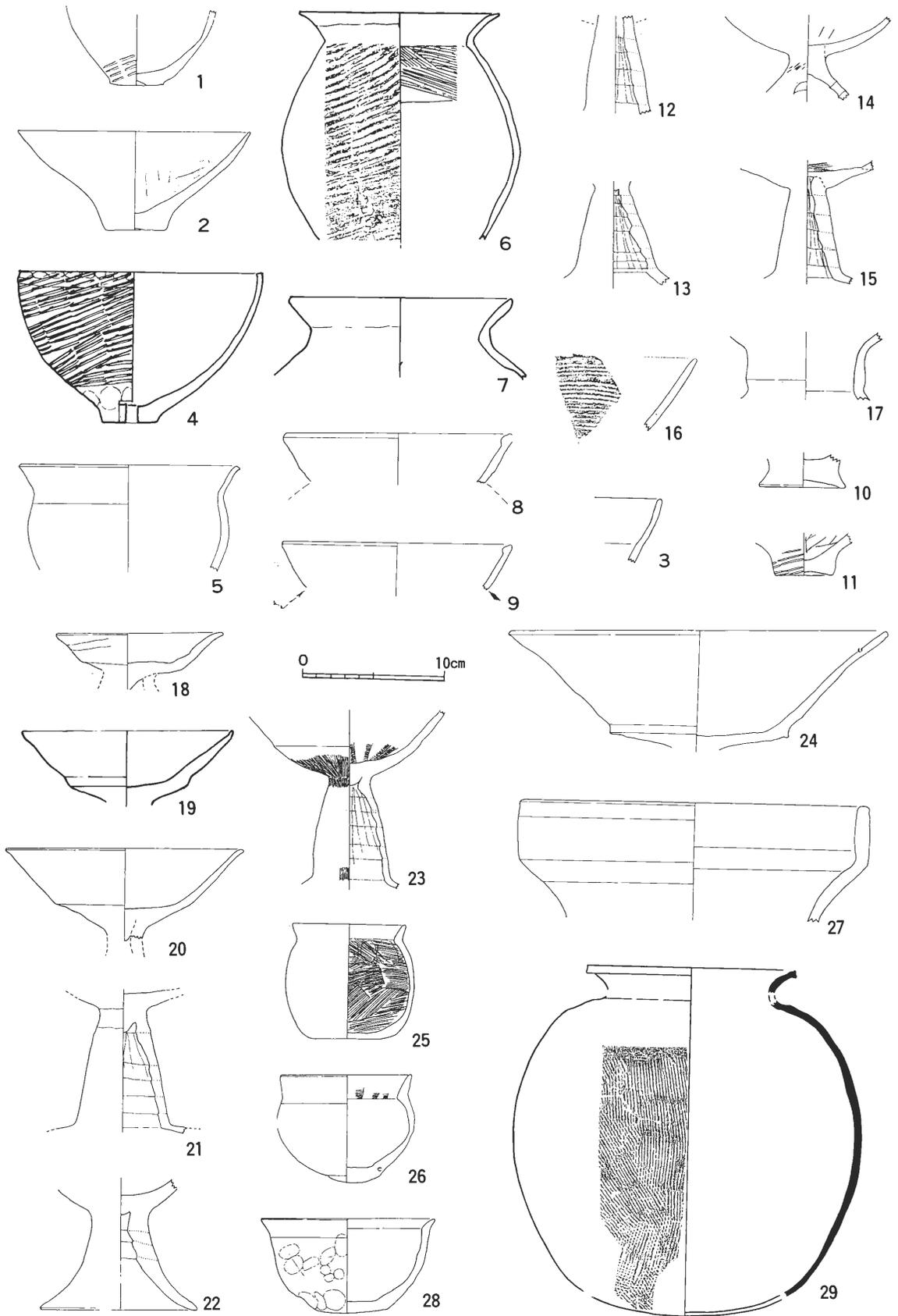


fig 5 野田地区遺跡 溝10 (1~17) 溝9 (18~29)

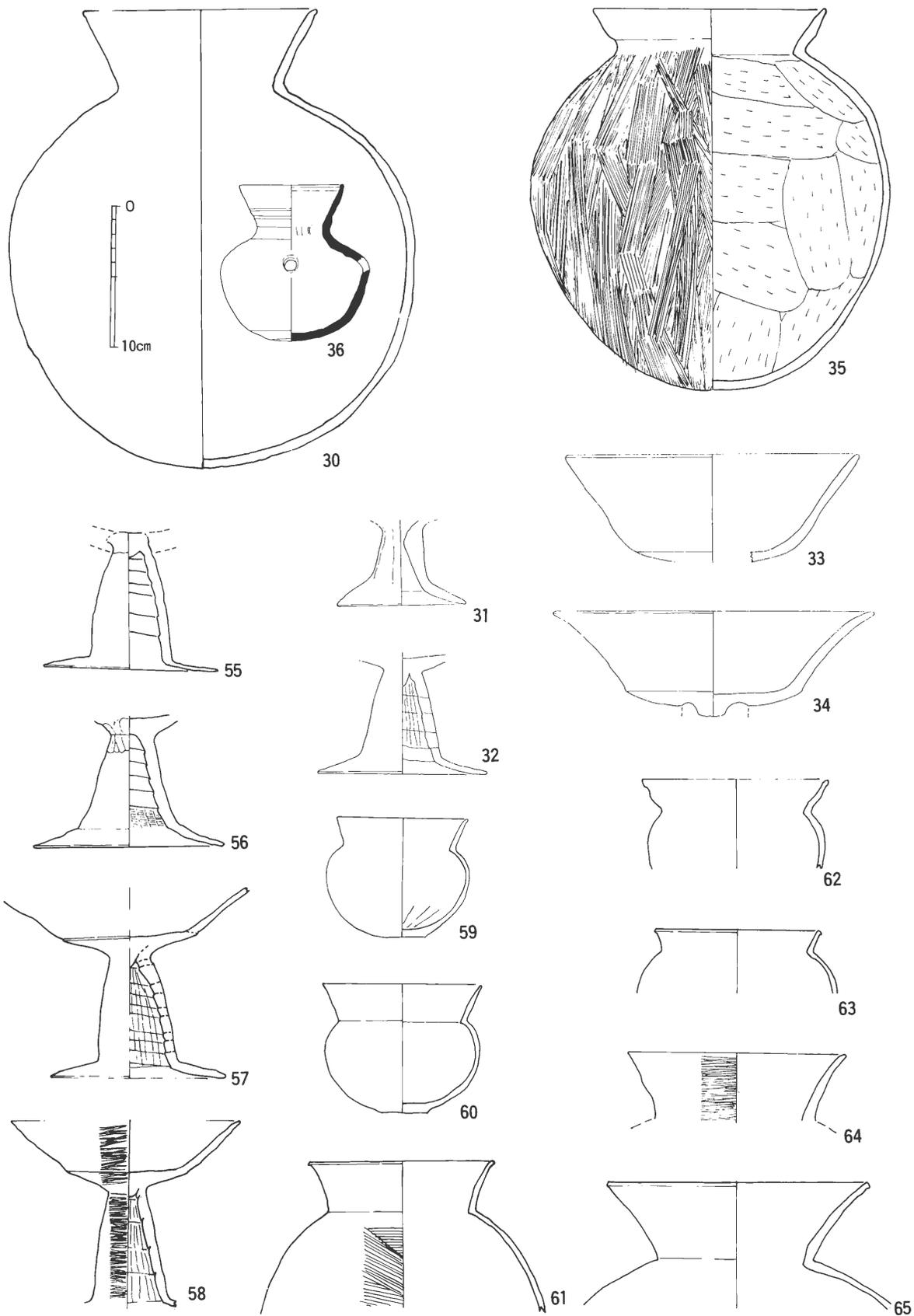


fig 6 野田地区遺跡 溝8 (30~36)、斜面堆積包含層 黒褐色粘性土 (55~65)

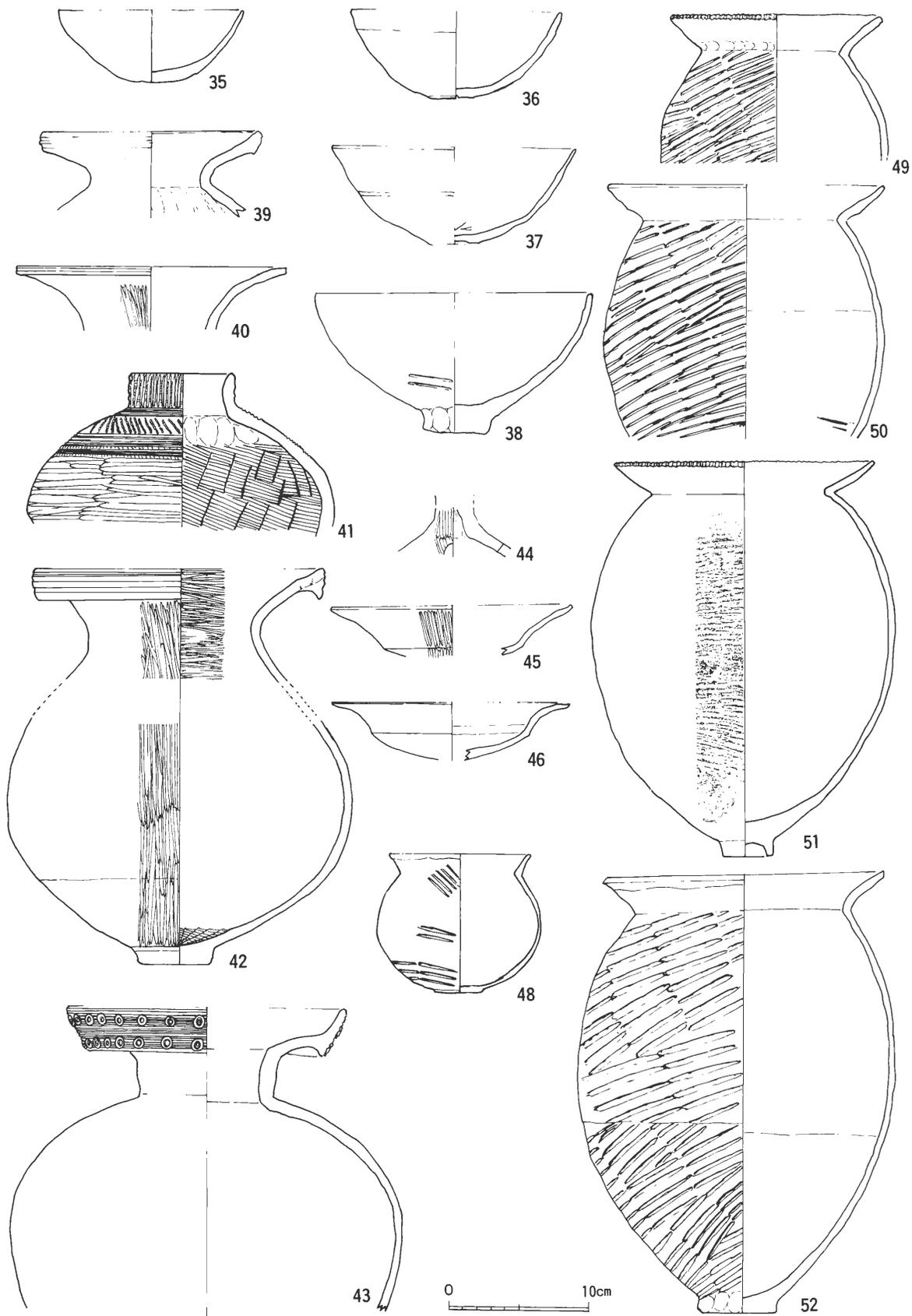


fig 7 野田地区遺跡 4区 斜面堆積包含層 灰色粘性土 (35~52)

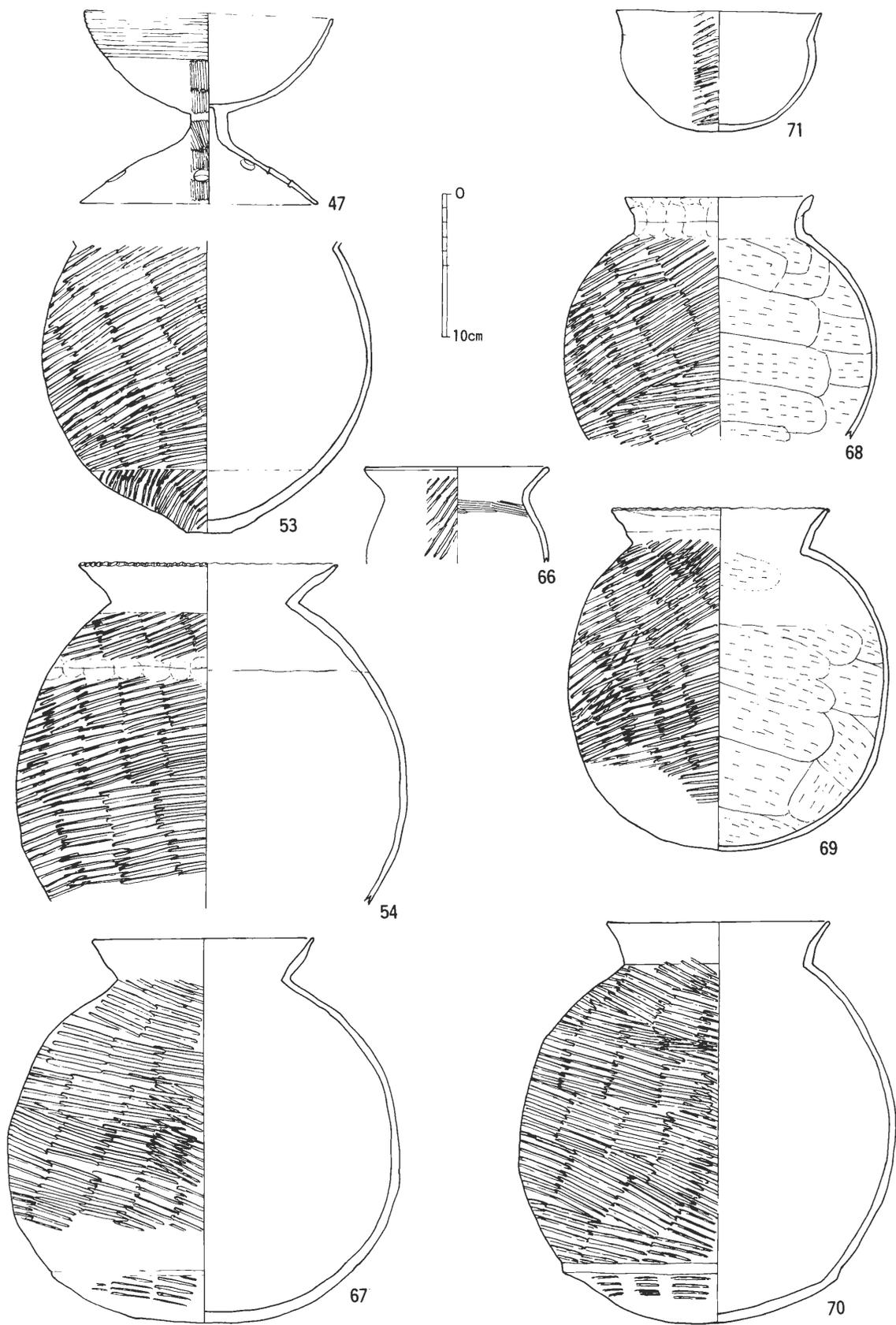


fig 8 野田地区遺跡 斜面堆積包含層 灰色粘性土 (47・53、54) 黑褐色粘性土 (66~71)

土師器 土師器には、皿、杯、高杯、甕などがある。

杯 (32~36) 口径12.5~13.5cm、器高 3.5cmを測る。体部下半から底部の外周部をヘラ削りし、口縁端部に一条の沈線をめぐらせる34や、体部全面を数回にわたってナデ調整し、底部未調整の杯 (32、33) や口縁部のみナデ調整をおこなう35などがある。36は、端部に沈線を一周させ、ロクロによるヨコナデ調整をおこなう。焼成は、土師質で良好である。

甕 (29~31) 口縁部がくの字形に外反するタイプである。29は、体部が張る。外面はハケ調整し、内面はヘラ削り調整のちハケ調整 (29) とナデ調整のちにハケ調整 (30、31) がある。

須恵器 須恵器は、蓋、杯、皿、鉢などがある。

杯 (37~41) 高台のつくB (37) と、つかないA (38~41) がある。杯Aは、底部未調整のものが多く。杯Bは、断面台形の高台をつける。

灰釉陶器 (43) 壺がある。釉は、口縁~肩部上半にかけては全面にかかり、体部下半は、片面のみかかる。焼成時のひび割れが、体部中央にある。

黒色土器 (42) 杯がある。杯は、小さい断面三角形の高台をもつA類である。内面全体を丁寧にヘラ磨き調整し、外面は、口縁部を除いて、ヘラ削り調整をおこなう。

溝7出土遺物は、須恵器杯や灰釉陶器壺或いは土師器杯34~36などの一群と土師器杯32、33、黒色土器杯42など一群、この二群の遺物がある。

野田地区遺跡4区・溝6 (図版2、11)

溝6出土遺物は、土師器、黒色土器、須恵器などがある。

土師器 土師器には、杯、碗、皿がある。

杯 (44、45) 杯は、底部未調整で、体部から口縁部にかけて数回のナデ調整をおこなう。

碗 (47、48、50、51) 体部から口縁部にかけて数回のナデ調整をおこなう。

黒色土器 黒色土器には、碗がある。全て内面に炭素を付着させるA類である。

碗 (46、49、52) 外面をナデ調整をおこなう。内面は、太いヘラ磨き調整を全面におこなう。46は、ヘラ磨き調整以前にナデ調整をおこなう。

野田地区遺跡4区・溝5 (図版2、11)

土師器、黒色土器がある。

土師器 土師器には、碗、皿がある。

碗 (58) 底部のみの破片で、内面ナデ調整をおこなう。

皿 (59~61) 皿は、口径9cm、器高1.7~2.2cmと口径12cm、器高2.2cmのものがある。共に、数回にわたり、ナデ調整をおこない、底部は、未調整である。

黒色土器 黒色土器には、碗、壺がある。碗はA、B類がある。

碗 (53~56) A類 (53~55) とB類 (56) がある。A類は、内面を丁寧にヘラ磨き調整をおこなうもの (53) と太くて荒い磨き調整をおこなうもの (54)、或いは、ハケとナデ調整をおこない、

ヘラ磨き調整をおこなわないもの(55)がある。B類の椀は、内外面を太いヘラ磨き調整をおこなう。見込みには、焼成時に付着した、重ね焼きの痕がある。(56)

壺(57) 外面をナデ調整をおこなう。鳴神地区遺跡に類例がある。

藤並地区遺跡・溝1(図版1、10)

土師器、黒色土器、須恵器がある。

土師器 土師器には、杯、皿、甕、鉢がある。

杯(1~18) 杯には、高台のないもの(1~16)と高台をもつもの(14、17、18)がある。平坦な底部から直線的に口縁部に至るものや内湾しながら口縁部に至るものなどある。体部から口縁部にかけては、数回にわたってナデ調整をおこなう。見込みに「今南」とヘラで刻まれたもの(12)や底部中央に孔を穿ったものなどがある。また端部に沈線を施すものがある。

皿(19~24) 皿は、口径15~17cm、器高1.8~3cmを測る。口縁部が内湾するものや外反するものなどがあり、口縁から体部にかけては、1~2回にわたってナデ調整をおこなう。底部は未調整。

黒色土器 杯、皿がある。全てA類である。

杯(26~28) 杯は、高台のないA(26、27)と高台をもつB(28)がある。杯Aは、外面全面をヘラ削り調整ののち、太いヘラ磨き調整を底部、体部に粗くおこなう。内面は、全面にヘラ磨き調整をおこなう。杯Bは、外方向にふんばる高台をもつ。体部外面は、指おさえののちに、荒いナデ調整をおこない、側壁と見込みに太いヘラ磨き調整をおこなう。

皿(25) 皿は、高台をもち、口縁部に幅広いナデ調整をおこない、内面は、口縁端部をのぞいた全面に、太いヘラ磨き調整をおこなう。

以上が、平安前~中期に属する遺物の概要である。紀伊における平安時代の編年の大要は、既に紀の川流域を中心とする西国分Ⅱ、鳴神地区遺跡などにおいて提起されており、また藤並地区遺跡^{註1}溝1出土遺物も、平城宮SD650A様式と近似する15、16、26、27の杯類の存在から、9世紀後半~未段階との位置づけがなされている。紀伊における蓄積や他地域の編年案に依拠し、各遺物の編年的位置づけを考えれば、溝7は、須恵器、灰釉陶器などが平安京左兵衛府SD04に併行する事から、9世紀前半の一群と把握、また32、33などは、藤並・溝1に併行することから、9C後半代と把握する。溝6は、9C後半の一群と更に土師器椀或いはナデ調整の明瞭化などによって10世紀前~中葉の一群がある。溝5は、黒色土器B類や溝5を切ってつくられる溝4最下層には、終末期の黒色土器と初現期の瓦器の共伴する層があることから、10世紀中~11世紀前半代に属する遺物と考えられる。

紀伊・有田川水系の平安時代前~中期に属する遺物の編年や器種構成、或いは土器に投影された地域色など多岐にわたる諸問題については、報告書で展開する。

註1 紀伊における平安時代の編年案については、主として武内稚人氏によって検討されている。概報作成にあたり、多大の御教示をうけた。記して感謝する。

4. 平安時代後期～鎌倉時代

野田地区遺跡 4区溝4～1、5区溝1、藤並地区遺跡土坑1 などから11～14世紀にかけての遺物が出土した。

野田地区遺跡 4区・溝4 (図版3、12)

灰色土出土遺物 最下層の灰色土より、土師器、黒色土器、瓦器などが出土する。

土師器 口径15cm前後、器高 3.5cm前後の大皿と口径 8～9 cm、器高 1～1.5cmの小皿がある。大皿には底部指おさえ (63～67) と糸切り (62、68～70) があり、口縁部はすべて右回りに1回か2回の横ナデで仕上げられる。小皿は底部指おさえ (74) と糸切り (71～73、75～79) の2種がある。糸切りは回転糸切り (71、78) や静止糸切り (72、73、75～77、79) がある。口縁部はすべて一回のナデ調整で仕上げる。

黒色土器 黒色土器は椀がある。内面全体と口縁部外面の一部が黒色化するA類が全てである。椀 (80～85) は、平坦な底部 (83～84) 或いは丸い底部 (81) からわずかに内弯しながら立ち上がる体部をもち、端部に沈線をもつ (84) とそのまま丸める (81～83、85) のものがある。内外面の調整は、内外面共に丁寧に磨いたもの (82、85) と粗く磨いたもの (83、84) 或いは磨き調整を全く省略し、ナデ調整のみで仕上げるもの (81) など多様である。体部から口縁部外面に凹凸をもつ84は外面削りののち磨くが、他の椀は磨き調整の前は全てナデ調整によっている。

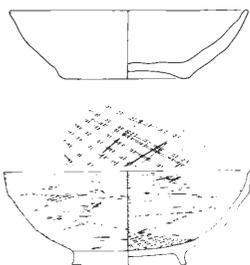


fig 9 藤並地区遺跡 土坑1

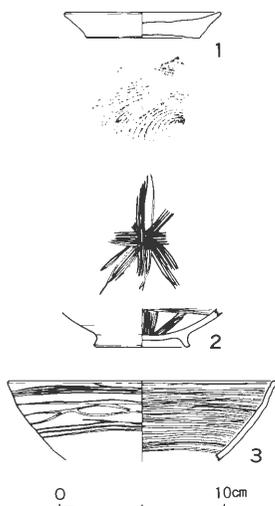


fig 10 野田地区遺跡 溝4 淡灰色砂層

瓦器 瓦器は椀のみで、皿はない。瓦器椀は口径15～17cm、器高 5～6 cmを測る。断面台形を呈する高台をもち、平坦な底部に内弯する体部がつく。沈線をもつもの (86) ともたないもの (87～95) がある。内外面の磨き調整は、外面については4分割や乱方向に太いヘラでおこなうもの、内面については連続圏線ミガキ調整 (86) 以外は乱方向におこなわれる。磨き以前にケズリ調整がおこなわれるもの (88) がある。見込みに暗文をもつもの (86) もある。86は器形としては大和型であるが見込みの暗文は同時期の大和では類例をみないものである。87～89は、和泉型に属し、90も可能性をもつ。^{註1} 89については大園遺跡井戸801に類例がある。^{註2}

淡灰色砂層出土遺物 灰色土の直上に位置する砂層中より灰色土出土遺物と同時期と想定される一群の遺物が出土する。瓦器、土師器がある。

瓦器 椀がある。見込みに菊花状暗文をもつ。側壁磨きは連続圏線状に密におこなわれる。(fig 10 2、3)

土師器 皿である。静止糸切りをもつ。(fig 10 1)

註1 川越俊一、橋本久和両氏御教示。 註2 尾上実氏御教示。

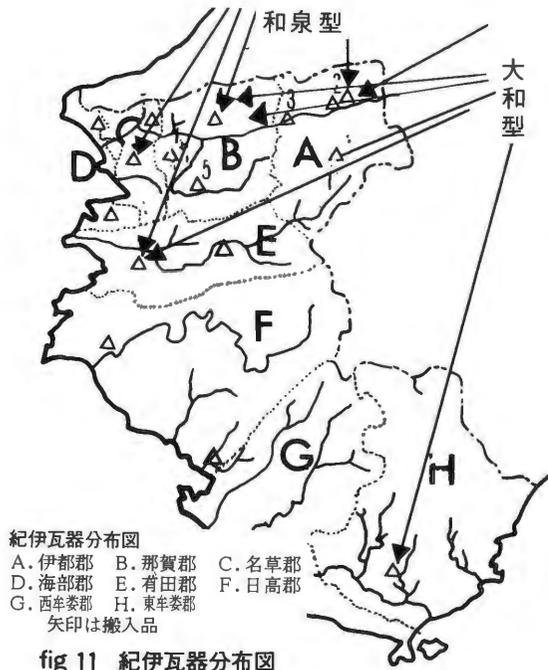


fig 11 紀伊瓦器分布図

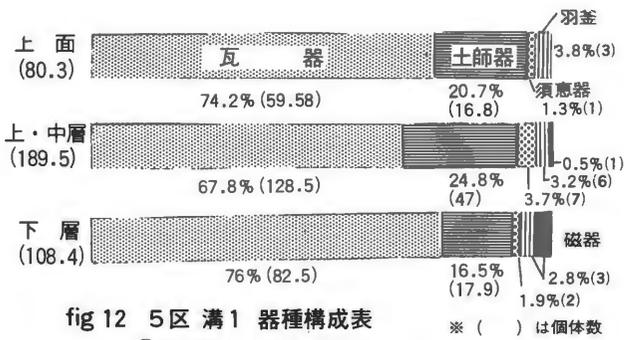


fig 12 5区 溝1 器種構成表

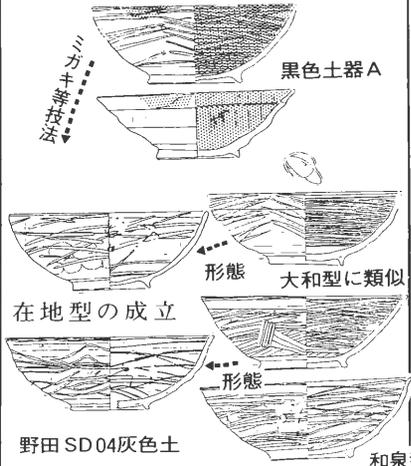
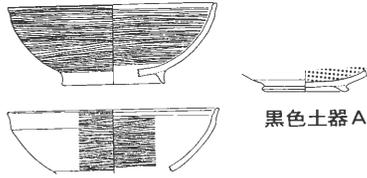
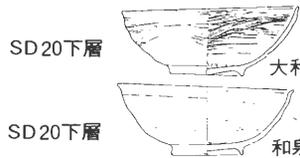
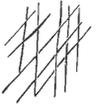
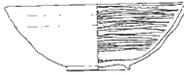
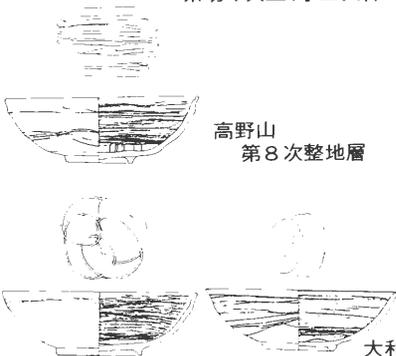
◎ 宇野隆夫 (口縁計測法による)



fig 13 瓦器小皿 焼成方法



fig 14 13~14世紀前半代 瓦器椀 暗文の変化

	有 田 郡	名 草 郡	那 賀 郡	伊 都 郡
11	 <p>黑色土器A</p> <p>三カキ等技法</p> <p>形態 大和型に類似</p> <p>在地型の成立</p> <p>野田 SD04 灰色土</p> <p>和泉型</p>	 <p>黑色土器A</p> <p>秋月 Pit 17 「ての字状口縁」 共伴 「黑色土器B」</p>	 <p>岡田</p> <p>SD20下層 大和型</p> <p>SD20下層 和泉型</p>	 <p>高野山 SK 1002</p> <p>大和型の影響</p>
12	<p>SD04 灰色土 糸切り大皿、小皿共伴</p>  <p>東播系播鉢</p> <p>日光神社</p> <p>12末～13初にかけて紀伊 では瓦器一般化</p>	<p>和泉型の搬入多い。</p>	 <p>岡田 T-P</p>	 <p>鍔付羽釜(2cm) 共伴 糸切り大皿、小皿共伴</p> <p>高野山 第8次整地層</p> <p>大和型</p>

<p>13</p> <p>野田5区SD01下層</p> <p>野田4区SD03下層 和泉型 野田5区SD01中層</p> <p>野田4区SD03上層</p>	<p>秋月P13</p> <p>秋月P12 和泉型</p>	<p>岡田T-Pit</p> <p>岡田T包</p> <p>岡田V包</p>	<p>大和型の搬入多く 形態・技法近似する 和泉型・大和型 搬入</p> <p>東家SK1</p> <p>船岡山</p> <p>東家SK29</p>
<p>14</p> <p>野田4区SD02</p> <p>有田郡 13C~14Cにかけて暗文、大和に類似</p>	<p>奥山田</p>	<p>福田地区・包</p> <p>福田地区・包</p>	<p>14C前半段階まで 外面ミガキ残存</p> <p>船岡山</p> <p>東家SK11</p> <p>東家SD01</p>
<p>15</p>			<p>白磁</p>

fig 15 紀北地方 瓦器椀 地域色一覧表

羯磨正信、小賀直樹、吉田宣夫、武内雅人、土井孝之各氏の発掘成果から各掲載した。

藤並地区遺跡・土坑1 (fig 9)

瓦器、須恵器がある。

瓦器 椀がある。断面台形の径の大きい高台をもち、平坦な底部から内弯しながら立ち上がる体部が口縁部で屈曲して立ち上がる。沈線をもち連続圏線ミガキ、外面は5分割と想定される磨きがある。見込みには斜格子の暗文をもつ。大和型に属する。

須恵器 皿である。焼成が甘い。口径14.3cm、器高4～4.3cm。底部静止糸切り。白灰色。

野田地区遺跡5区・溝1 下層～上面 (図版 4、5、13、14)

下層、上層・上面より瓦器、土師器、須恵器、日本製陶器、中国製陶磁器、瓦など出土する。

下層出土遺物 (96～107、113～121、130～132、135～137、141、142)

瓦器 瓦器には椀 (96～107)、皿 (117～121)、鉢 (137) がある。断面三角形の貧弱な高台に、平坦な底部 (98～100) 或いは丸味を帯びた (96～98、101～107) 底部に内弯する体部をもつ。側壁磨きは連続圏線状に施されるが、比較的細かい1mmと太い2mm前後のものがある。見込みには種々の暗文が施される。外面には粘土の接合痕が顕著にのこる。皿は内面に暗文をもつもの (121) ともたないもの (117～120) がある。鉢は器壁が厚く、内面に間隔の荒いミガキがある (137)。

土師器 口径15cm前後の大皿 (130～132) と9cm前後の小皿 (113～116) がある。共に底部糸切りと指おさえがある。他に、玉縁をもったり (136)、口縁部に面をもつ白磁 (135)、褐釉の壺 (141)、東海糸の壺 (142) などがある。

中～上面出土遺物 (108～112、122～129、133、134、138～140、143)

瓦器 瓦器は椀 (108～112)、皿、小椀 (129)、二重高台をもつ底部などがある。中～上面出土の瓦器椀は、下層出土の椀に比べて、側壁磨きも太く、間隔も荒いものが多い。110、112は和泉型である。

土師器 土師器は、大皿 (133、134)、小皿 (122～127)、高台をもつ小皿 (128)、羽釜 (140) などある。

須恵器 東播糸播鉢 (138)、甕 (139)、産地不明の甕 (143) がある。

野田地区遺跡4区・溝3 (図版 6・15)

溝3は、東肩部を補強用につきかためた黒褐色土 (149～153、164)、溝内堆積土の最下層 (148、165) 上層 (144～147、154～163) の層位的区分がある。瓦器 (144～153)、土師器 (154～165) がある。

野田地区遺跡4区・溝2 (図版 7・16)

最下層 (176、179～181、187～188)、下層 (172～175)、中層 (167～171、176～178、182～186) 上層 (166) の層位的区分がある。瓦器椀は、溝3と同様の形態をもつ一群と更に口径が縮小した一群が存在する。

11～14世紀代出土遺物の提起する問題

連続して営為される溝群より出土した、11～14世紀代に属する遺物群が提起する問題点について有田川水系を基軸としつつ、それら遺物が、紀伊国の中で占める位置について概観する。

1. 野田地区遺跡11～14世紀代、遺物の編年

中世遺跡に普遍的な日常雑器類の地域単位の編年作業は、生産単位や流通の問題或いは遺跡の動向の把握など中世社会の様相解明に向けた基礎的作業である。とりわけ、日常生活に占める役割が大きい瓦器碗については、時期による形態変化や地域色が最も顕著に投影される遺物であり、また畿内一辺にその分布圏があるため、各地域間の編年上の基礎資料としては、11～14世紀代に限っては最も重要な遺物である。既に13～14世紀前半代の野田地区遺跡の出土遺物については、編年案を公表しており、今回は簡単にふれる。11～14世紀代に属する一群の遺物は、同一遺跡内で層位、重複関係をもって検出された資料^{註1}である。層位、重複関係によれば、11～12世紀代の溝4、13～14世紀代の5区溝1下層→5区溝1・中～上面・4区溝3下～中層→4区溝3上層→4区溝2の編年が可能である。

2. 「紀伊型」瓦器碗の実態と地域色

稲垣晋也・白石太一郎両氏の地域性の指摘や橋本久和氏の5つの地域型の設定など、瓦器碗の地域色の抽出作業は、中世土器の生産・流通の諸問題解明に向けた基礎的作業であるとの認識故に活発におこなわれている。橋本氏の設定された紀伊型は、限定された資料内であり、氏も言われるように他地域と比べて実態がいま一つ不明であったが、近時の発掘資料の増加にともなって、紀伊型の実態や地域色が把握されつつある。紀伊国における地域色の抽出作業は、なによりも瓦器生産工人の単位把握や流通の実態を解明する上でも必要な作業であり、紀伊においては、他地域に比べてより鮮明に郡単位で地域色が設定しえるものと考えられる。

瓦器碗の成立 瓦器碗成立に関して紀伊における資料は、有田郡・名草郡・伊都郡の三郡に存在する。有田郡は、野田地区遺跡・溝4灰色土、藤並地区遺跡土壇などに成立期の資料がある。溝4は、在地型の黒色土器A（80～85）と和泉型の瓦器（87～89）及び和泉型の可能性をもつ瓦器（90）、大和型及び大和型に近似する瓦器（86）、在地型の瓦器（91～95）が共伴して出土する。瓦器成立当初に、大和、和泉名型の搬入品の存在をみることは、有田郡の瓦器成立過程に、両地域の明瞭な影響を受けたことが考えられる。両地域の影響は、大和型に近似する瓦器碗86→在地型の瓦器碗92、和泉型の可能性をもつ瓦器碗90→在地型の瓦器碗91とまず形態の上であらわれたのである。80～85の在地産の黒色土器碗から在地の瓦器碗への形態上の近似性を指摘する事はできない。形態での近似性はない黒色土器碗は、しかし、在地型の瓦器碗91・92の調整技法——内外面の太く浅い、乱方向の磨き調整——と同一の技法をもつ。即ち、瓦器成立過程で、形態は二地域の明瞭な影響を受けつつ、技法に関しては在地の黒色土器碗の伝統を踏襲して、有田郡では瓦器生産が開始されたのである。93～95の一群の瓦器碗は、日光神社出土の12C後半代に位置づけられる、やや口縁部が^{註2}

直線的にのびる瓦器椀と近似するため、瓦器成立から完成期の11～12世紀代にかけて、有田郡特有のタイプと想定される。名草郡の中心部に位置する秋月遺跡ピット17からは、黒色土器A・B類、瓦器、土師器が出土する。瓦器椀は、内外面のへら磨きが密に施され^{註3}、見込み暗文はなく、ナデ調整の状態であり、口縁端内面には沈線がめぐる。平安京、和泉などで出土する「て」の字状口縁の土師器小皿が共伴しており、和泉などの地域との関連が注意される。伊都郡は、高野山に11世紀代に属する資料があり、大和との関連が注意される。以上、11世紀代に属し、瓦器成立過程に関わると考えられる三郡の資料をみたが、言える事柄は、有田郡については、大和、和泉の影響を受け瓦器が成立、伊都郡については、大和型の影響を受け瓦器が成立、名草郡については、和泉との関連性をもつことが想定しえる、と三郡それぞれ瓦器成立過程の異なる点が上げられる。それは瓦器生産集団が、現状では郡単位に存在したことを示している。有田郡における瓦器成立時期は、和泉型が尾上編年Ⅰ-1期、11C中葉段階、大和型及び大和に近似する瓦器椀が、川越編年Ⅰ・B～D段階11C中～末段階であり、11C中葉前後に瓦器生産開始期を設定したい。

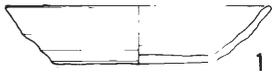
瓦器椀の展開 生産開始期から各郡で地域色をもって生産されはじめた瓦器椀は、成立時の地域色を基本的に継続発展させつつ、各郡独自の器形を生み展開したが、12C代の瓦器椀は各郡共に出土量が少ない。紀伊で瓦器が大量に出土し、一般化したととらえられるのは、畿内と同様、12末13C前半段階にかけての時期である。12末～14C前半段階、つまり鎌倉時代に属する瓦器椀は、各郡共に独自の展開をみ出しえる。この期は、形態（口径・器高→容量）・技法（見込み暗文）共に顕著な変化を示す。有田郡は、この期は口径の縮少が顕著で、内面のミガキ、暗文の変化は大和型の変化に近似する。和泉型の搬入があるが、直接的な影響は認められない。野田地区遺跡に近い下遺跡でみる和泉地方との関連性は、13後半～14C前半には、有田郡では一切認められず、大和との関連性の方が強い。伊都郡は、高野山、東家、神野々廃寺各遺跡などにこの期の資料がある。橋本市内の、東家、神野々廃寺各遺跡の資料は、和泉型、大和型の搬入品が目立つが、形態・技法共に、在地型には大和型の影響が強い。それは、14C前半段階まで、口縁端部に沈線をもち、外面磨きも残存するなどの点に明瞭にあらわれる。名草郡は、和泉型の搬入が目立つ。器形は、平坦な底部が体部下半で屈曲して口縁部にのびる独特なものである。瓦器展開期の13～14前半期は、紀伊では、三郡独自の地域色——たとえば、容量に関せば、有田郡は、口径の縮少が目立ち、伊都郡は口径器高共に縮少し、名草郡は器高が縮少するなど——が看取される。以上、瓦器の成立・展開に関し概略したが、少なくとも「紀伊型」は、生産開始期から郡単位で地域色が存在し、鎌倉時代にはそれがより顕著になる点が大きく把握しえると考えられる。消滅の問題やより詳細な地域色或いは生産工人の問題など多岐にわたる問題点は報告書で展開する。

註1 編年案に関しては埋蔵文化財情報No16で詳細にした。「野田地区遺跡整理報告—鎌倉時代の日常雑器類」

註2 舘磨正信「日光社発掘調査報告書」1968年

註3 小賀直樹氏を担当者として和歌山県教育委員会で発掘調査された。

註4 土井孝之氏御教示。



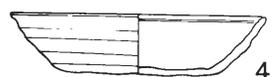
1



2



3



4



5



6



7



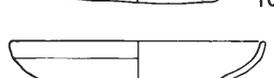
8



9



10



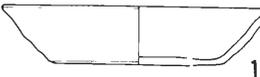
11



12



13



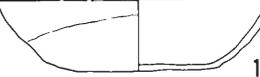
14



15



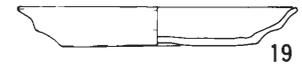
16



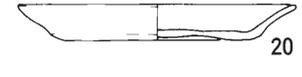
17



18



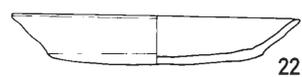
19



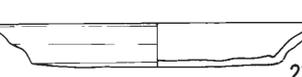
20



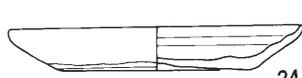
21



22



23



24



25



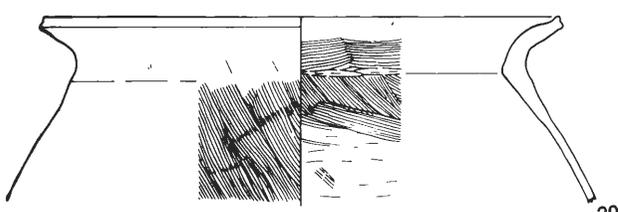
26



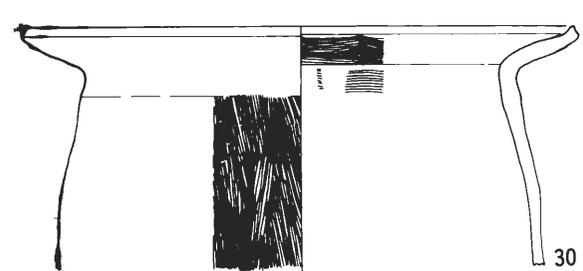
27



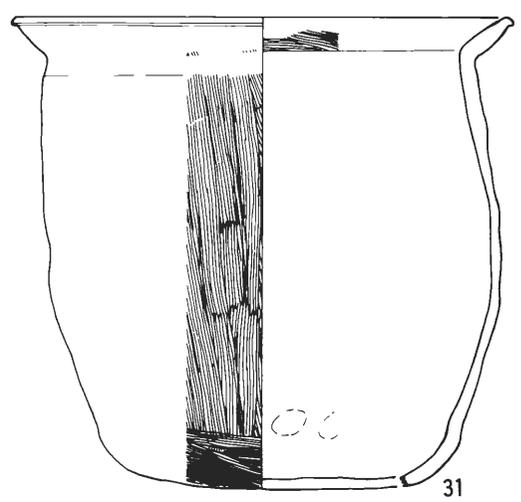
28



29



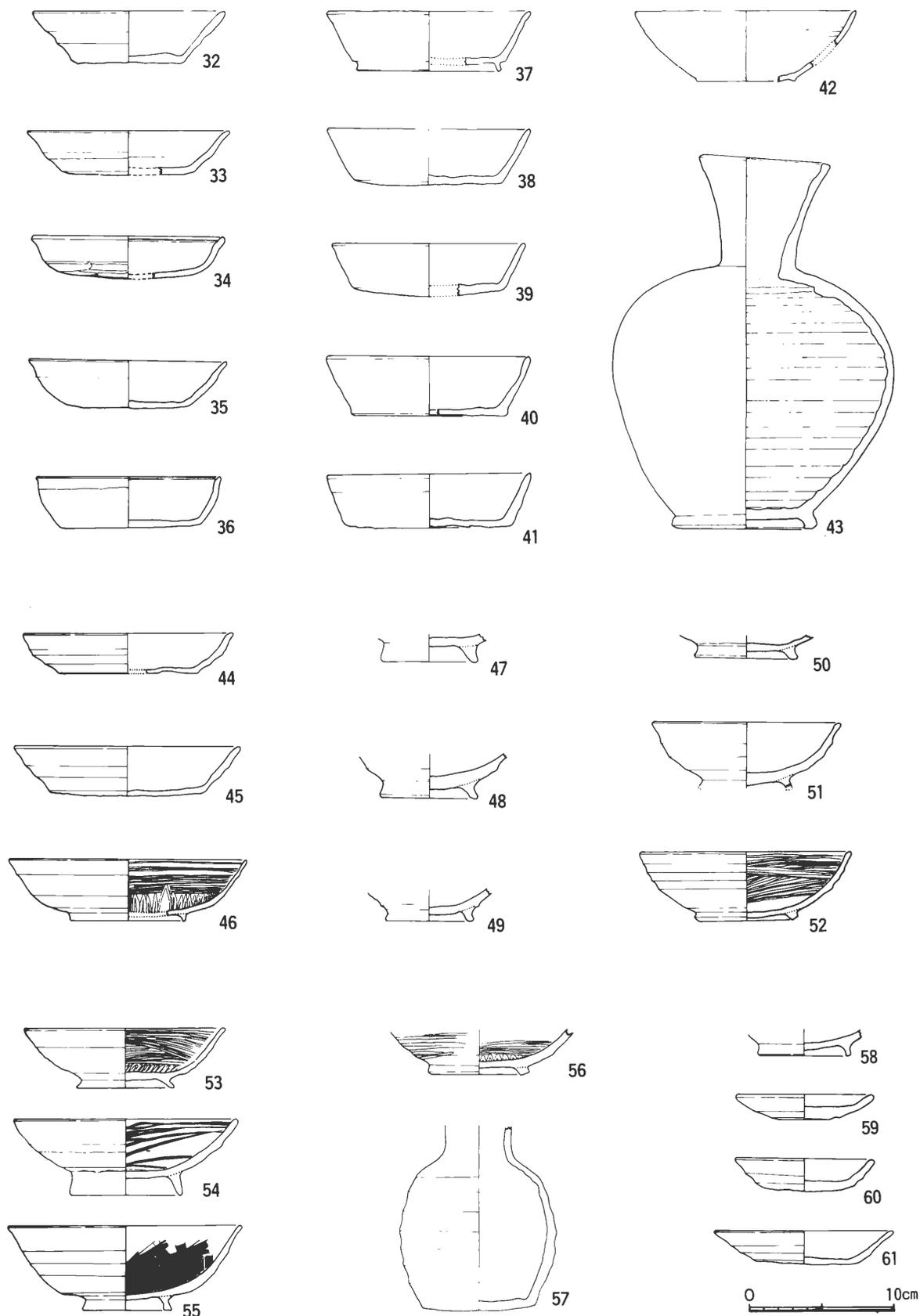
30



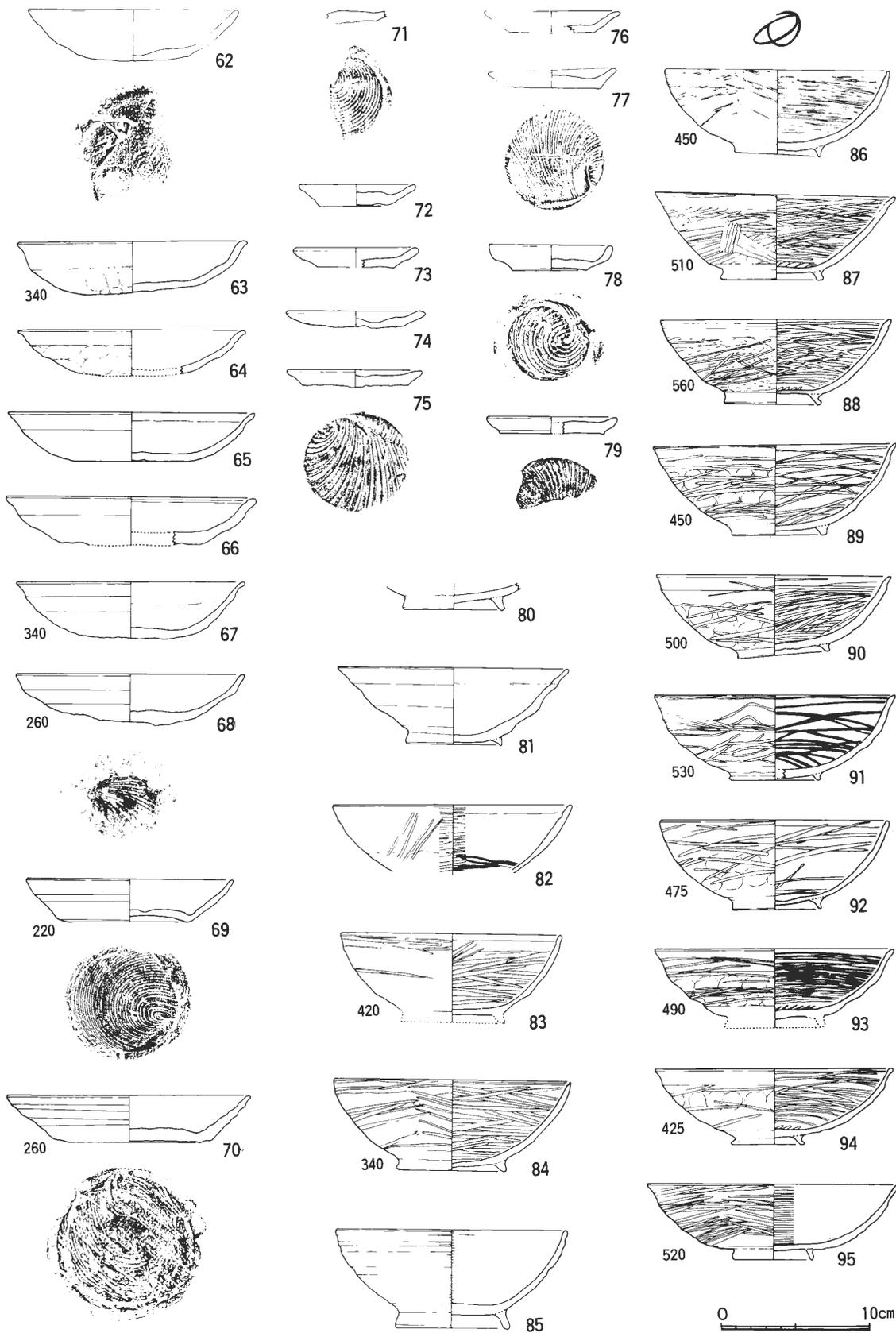
31



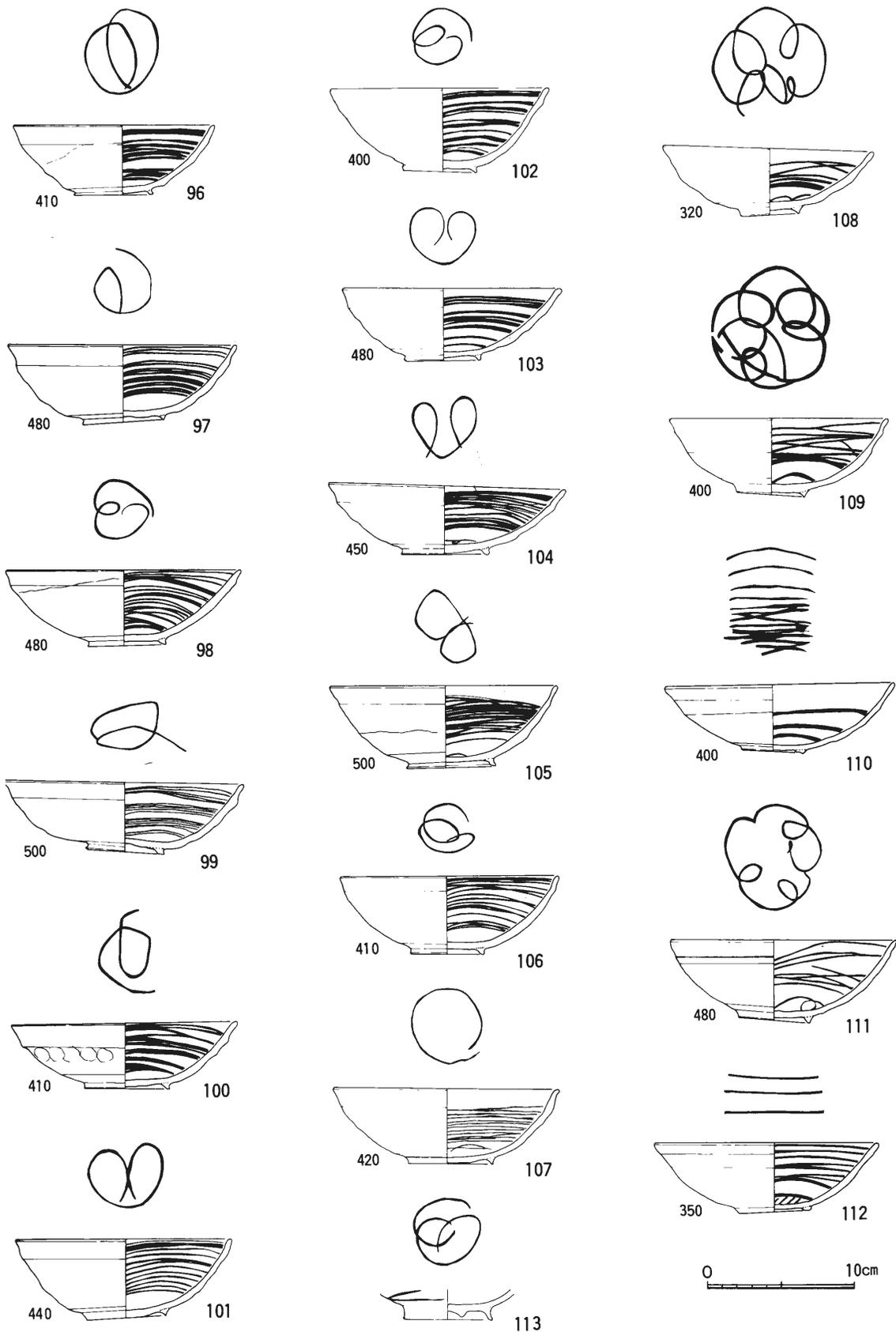
藤並地区遺跡 溝1 (1~28) 野田地区遺跡4区 溝7 (29~31)



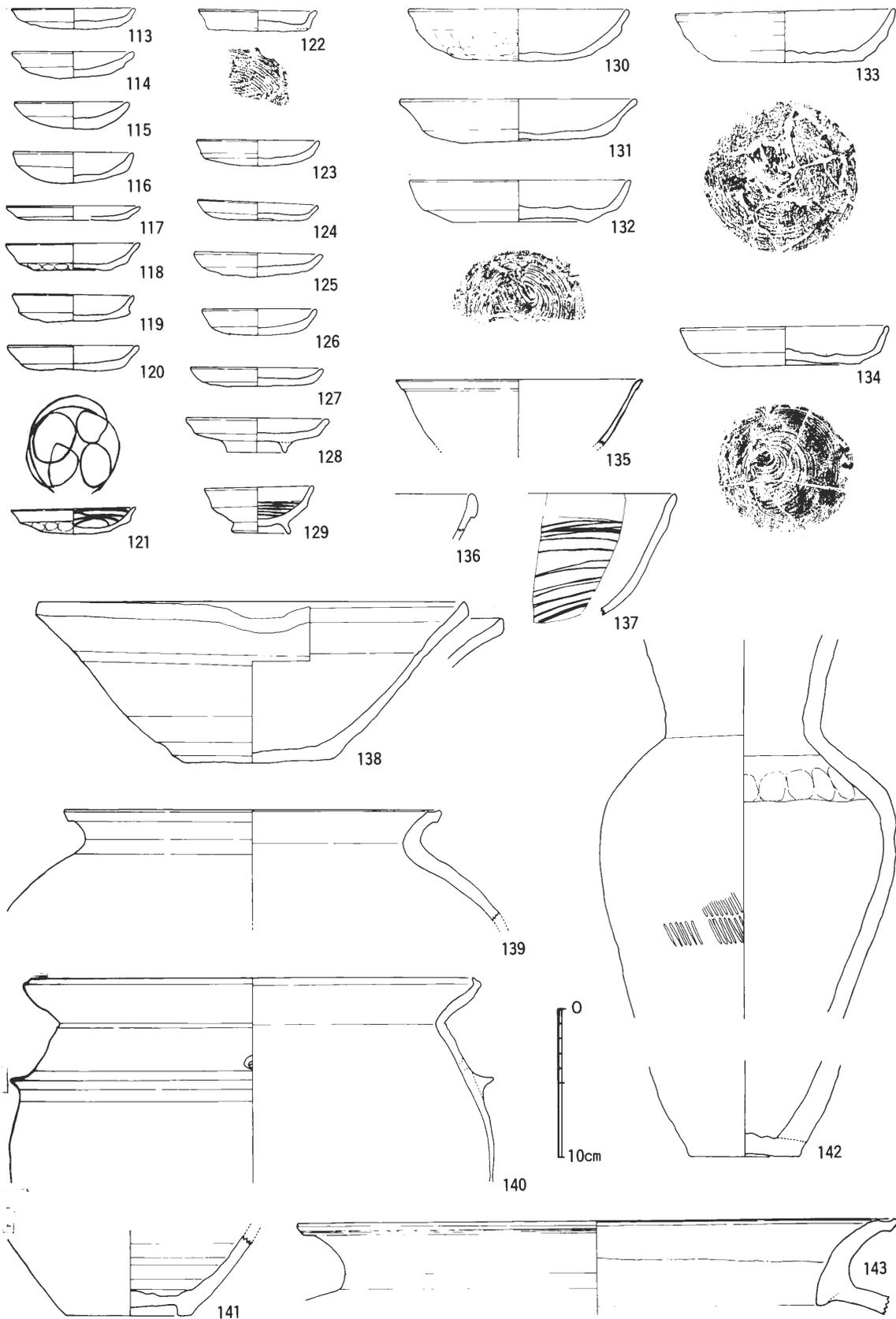
溝7 (32~43)、溝6 (44~52)、溝5 (53~61)



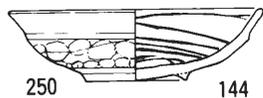
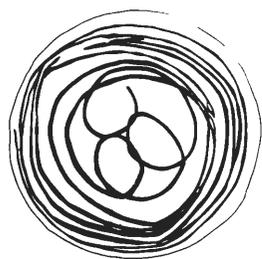
4区 溝4灰色土（土師器62~79、黒色土器A 80~85、瓦器86~95）



5区 溝1 下層 (96~107) 中~上面 (108~113)

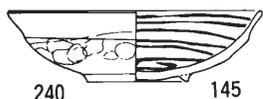


5区 溝1 (土師器 113~116、122~128、130~134、瓦器117~121、129、137、東播糸138、須恵器139、142、143、褐釉141)



250

144



240

145

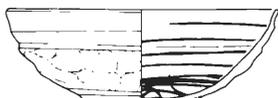
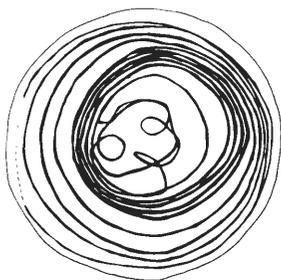


146



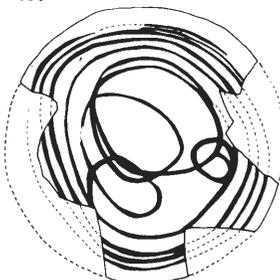
350

147



400

148



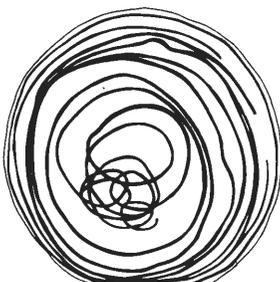
370

149



400

150



450

151



154



155



156



157



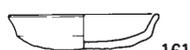
158



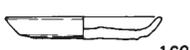
159



160



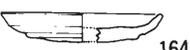
161



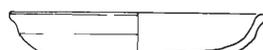
162



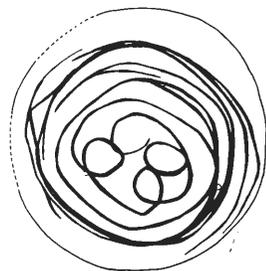
163



164



165

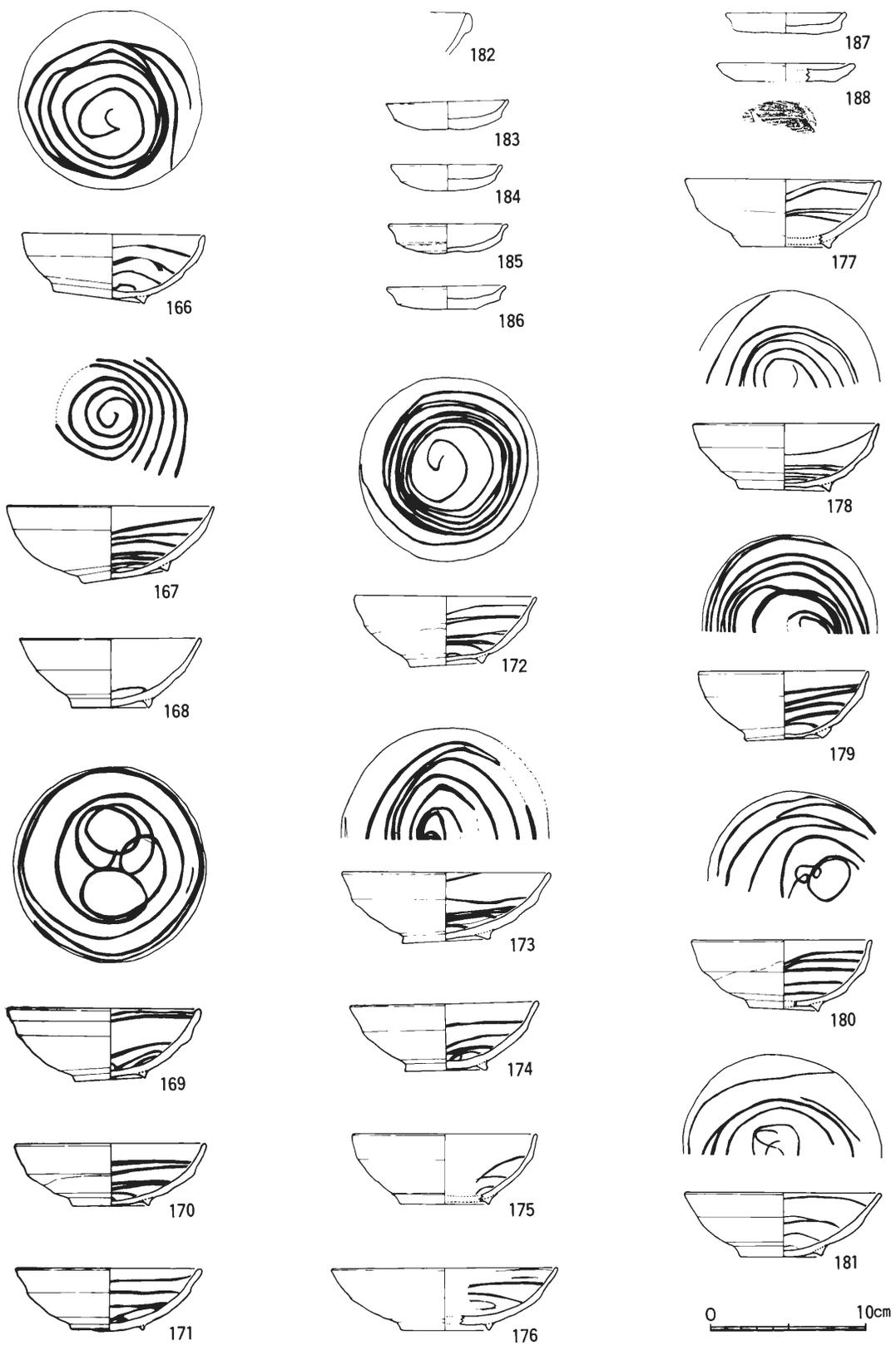


152



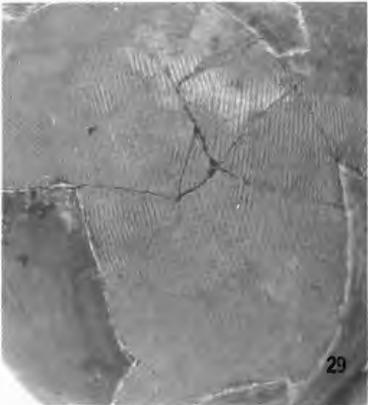
153







包含層 D1、C1 (弥生末~庄内期) D2~D4、C5 (古墳前期)





12



5



27



12



5



26



28



19



25



28



20



18



28



24



17



24



fig 9



28





83



86



90



84



92



70



81



89



70



68



67



69



68



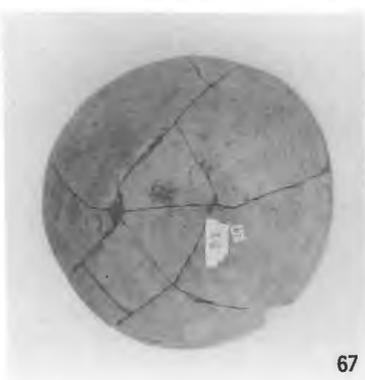
67



69



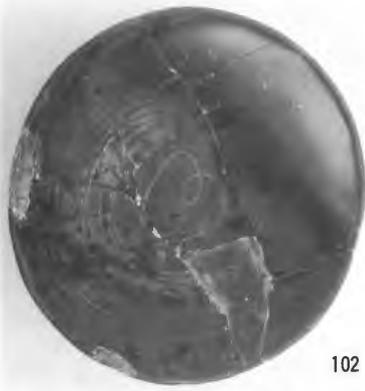
68



67



69



102



96



103



102



96



103



102



96



103



107



104



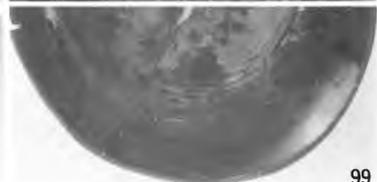
103



107



104



99



100



105



111



100



105



108



112



109



中層



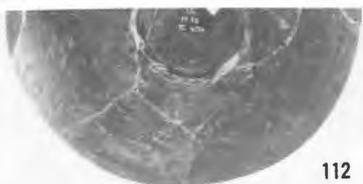
112



109



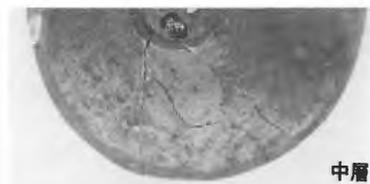
中層



112



109



中層



133



上層



141



131



上層



134



132



上層



132



138



上層



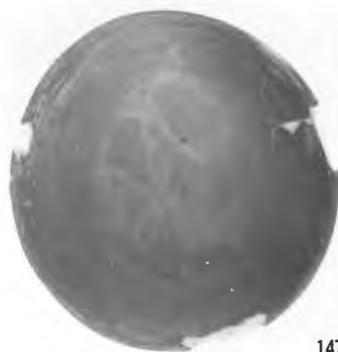
128



146



144



147



146



144



147



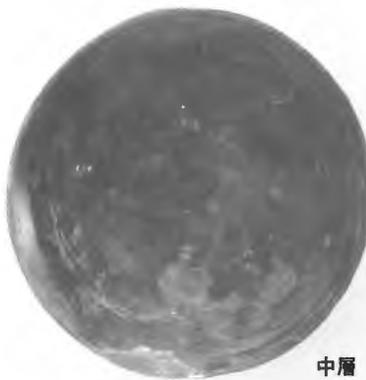
146



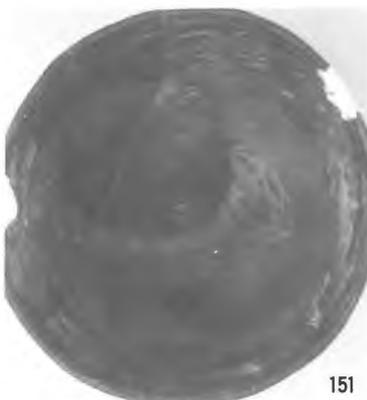
144



147



中層



151



中層



中層



151



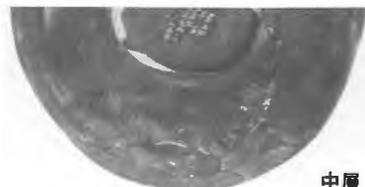
中層



中層



151



中層



野田・藤並地区遺跡第2次整理概報

昭和59年3月30日 印刷

昭和59年3月31日 発行

編集・発行 和歌山県教育委員会

印刷所 邦上印刷